

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻6月号(通巻587号)

風土



6

白牡丹
神蔵器

う
つ
う
つ
と
智
慧
熱
兆
す
白
牡
丹

風
邪
に
し
て
怠
け
て
ゐ
れ
ば
牡
丹
咲
く

一
年
の
土
ご
し
ら
へ
や
菊
根
分

春
一
番
二
番
泣
き
虫
明
史
か
な

東
京
の
土
を
啄
む
雀
の
子

春 深 し 皮 の 聖 書 に う す 埃 り
じ ふ い ち め ん 観 音 一 人 静 か な
桂 郎 の 蕎 麦 の す す り 音 桃 の 花
八 方 よ り 見 え て 古 巢 に 青 き 空
遠 雪 嶺 近 く は 桃 の 花 盛 り
は つ ら つ と 京 の 筍 曇 か な
春 陰 や ほ つ れ 茶 碗 に 金 を 蒔^ま く

註「ほつれ」は陶器などのひびや欠けた部分



竹間集

同人作品



地虫出づ

関根 洋子

三行の僧侶募集や地虫出づ
初蝶や三歩に足りて彼岸橋
苗木市明日の色を求めけり
切岸に水の一筋鳥交る
だみ声の鴉追ひゐて暖かし
啓蟄や畑仕事といふ遊び
春の海空と睦みて島を生む

ゆく春

田中佐知子

海坂のおぼろなる日や雛飾る
黒潮の流れ見ゆるや雛飾る
紀の川の奔流にのる流し雛
深信濃の鍬音ひびく花かたかご
雨あとの花かたかごは日を弾く
ゲレンデの日はなだらかに花かたかご
ゆく春の木に還らんと仏達

こゑかけて

南 うみを

初蝶の影枯草を離れけり
つばめ来と田溝の水の盛りあがり
さへづりに濡れある畝を打ちにけり
こゑかけて西行の日の花こぶし
草餅のいろ濃き姉の忌なりけり
畦塗りの影墓石にさしかかる
いたどりの深空へぼんと発ちにけり

雨水

島谷 征良

夕茜日々強うして春遅し
間道を来たる余寒の人のあり
春の雪まるくつもりて消えにけり
墨の香のどことはなくしてお涅槃会
春遅々と畑は均されしままに
悠々と雲の行きたる雨水かな
寒きときはひかざりし風邪を春なかば

椿餅

大竹 淑子

ク口ツカス京は北まで晴れわたり
風熄みし沈床花壇かげろへり
ひびかへる水琴窟や地虫出づ
朴苔みたちまち霽るる京の空
子は青春勿忘草のもう咲いて
雛罌粟の揺れを見てゐる乳母車
椿餅 京みやこに源氏物語

春寒し

齊藤 小夜

本棚に本戻しをり臙の夜
竹の幹軋る音ねすなり春一番
地虫出づ口笛吹いて男行く
自分史と云ふを頂く彼岸晴
旅の朝茶粥にそへて木の芽和
芹蓬摘みしはむかし師の畦に
春寒を握り駄まで一直線

つちふる

徳丸 峻二

子の列の次々屈み地虫出づ
臙より来て門札に顔寄する
何せんと持ち来し鉢めかり時
春寒や歩き疲れの足洗ふ
摘み草の三つ四つ放り園を出る
歌声の男過ぎ行く春の夜
つちふるや両手かざして人に会ふ

京都植物園 六句

たにわ
丹波の畦火

— 大竹 淑子 —

墓山へほら開ぐ丹たにわ波の畦火かな
子雀や棟に千木ある丹波かな
菜の花や子安地蔵の軒借りて
一つ家のめをとと語り梅の花
梅が香や細き流れに山の水
曇天に残されてをり梅梯子
老ひとりゐて耕は畦に沿ふ
行者堂へ降りる小駅のさくらかな
堅香子の花へ渡して鉄の橋
散り敷きてはねずの梅や小野郡

随心院
四句

花 三分内より覗く薬医門
百歳の小町の坐像桜冷え
春障子裡に声して白拍子
梅散るはねず踊りやわらべの衣のはねずいろ
踊の手揃ひて春の時雨かな
狂言の仮面小さし花の冷え
「土蜘蛛」の出でてつのれり花の雨
うぐひすやひねもすく燻る香時計
春光へみほとけの冷え纏ひ出づ
みほとけの遠見にさくらさくらかな

山河集

同人作品



神蔵
器選

牧野富太郎夢館

書齋には鞘堂雪割一花咲く
坊ちやん通りマドンナ通り風光る
白き書の帯のむらさき利休の忌
一棹の茶杓箆筒や鳥雲に
春眠を出でてスクランブルエッグ

林
いづみ

花吹雪見える所に母をおき

中村
洋子

硝子戸の引くをためらふ初音かな
洋館に和風庭園物芽立つ
広重の茜の空にさへづれり
夜を惜しみ吉野泊りや西行忌
春はあけぼの肘枕して涅槃像
ひと雨の雫あかりに雪柳

藤幸三郎

羽衣を纏ひし如く芽吹きけり
苗幅を測る歩幅や茄子植うる
ほとけ彫る石工の肩に風光る

丁藤
ミネ子

残雪を吹き上げ空へ道開く
水温む田の神もどる頃となり
水温む人肌色に草の丈
奈良漬に寄り目となりぬとのぐもり
春光や土の機嫌を手のひらに

林
和子

永き日や寸織る機の糸繋ぐ
古町に古き寺あり黄沙降る
引き鳥に谷川岳のオキノ耳
レコードの昭和黄色き春灯
永き日の日昏を畳む日本丸

オキノ耳ミキ峰 谷川岳の別名

風土独語／神蔵器



春禽や三百六十度青空

林 いづみ

秀句の条件の一つは、誰もがよく知り、よく体験をしていることで、しかも誰もがまだ俳句にしていけないものではなからうか。

掲出句の「三百六十度」は別に珍しい把握ではない。少し高い山やお城の天守閣などに登った時、東西南北、三百六十度の眺望、満天の青空に感動し、しばらく息を呑む思いで立ち尽す、そんな体験はおそらく誰もが持っているだろう。しかし「三百六十度青空」も「青空」は目の前に見えていながら、物の恒常性がかえってその物の存在を認識しないように、青空は青空として本当に認識するまでに達していないなかったのである。盲点を突かれた感じだ。

坂の石ころがりきらぬ日永かな

柿沼 盟子

春の日も、秋の日も昼の長さは略々同じであるが、春の日永は冬の短日の厳しさをかこった後ということで、日永は春の季語になっている。一日一日暖かくなる喜び、日の光も明るく麗らか、大景もとより長閑であり、小景また長閑である。

本来、日永と坂の石ころとは何の関係もない。しかし、何れの原因か、石ころが一つころと坂を転がって落ちて来た。作者は見るとなく転がって来た石ころを見ていたようであるが、石ころは坂の途中、作者の眼の前で止まってしまった。理屈をいえば坂がその辺りでゆるやかになっていたのか。ちよつとした窪みでもあったのかも知れない。だが、そんなことはどうでもよい。問題は途中で止った石ころではなく、ころがりきらぬ石ころである。もとより石ころは無心であるが、のどかな春の日、坂をころげ、坂をころがりきらぬ石は短編の一つも書けるほどの内容をもっている。絶妙の句である。

地虫出づ書舗に積まれし我が戦記

井口 光石

光石さんは今年三月『激闘ルソン戦記』、カバーに「螢と水と」(ある学徒兵のルソン戦記)を出版された。

私は約三百六十頁ほどの本を十日以上かかって読んだ。初陣の地、第十一章サントトーマス山稜線、特にバギオ防衛戦から第十六章敗残の溪など、とても長く読んでいることが出来なかった。これはもはや戦争などというものではない。

戦後六十年、あと四五年もすれば戦争体験者も居なくなるであろう。いま若者の間で戦争の体験者から話を聞き、集めている人が居るといふ。『激闘ルソン戦記』は、著者が七度は死に、七度生き代って得た真実の体験記である。あらためて平和の尊さ、を実感する。(以下略)

風土集



神蔵器選

坂の石ころがりきらぬ日永かな

東京

柿沼 盟子

黄塵の街を見下ろす猷血室

百円バス乗り継ぐ浅草風光る

馬酔木咲く児童劇団事務所前

自転車を土手に転がし土筆摘む

業平の寺へ走れる畦火かな

高槻

浅田 光代

魼挿して堅田の水の引き締まる

陽炎につかまり立ちの赤子かな

まつすぐに抱かれにくる子桃の花

舞殿に一面の琴初ざくら

地虫出づ書舗に積まれし我が戦記

川崎

井口 光石

草摘むやかつては飢餓の兵として

合掌す坊の朝餉の木の芽和

通院の勇氣少しく花辛夷

濾血機に縛られてをり花の昼

雪解けの浅間神社一の宮

東京

林 いつみ

初蝶は葬の家の門より来

春禽や三百六十度青空

山城は海拔八十青き踏む

初ざくら曜変天目茶碗出づ

川音の高し引く鴨送りけり

岩手

藤原キヨ

鳥ぐもり橋の一つを渡りけり

店頭の酒のネオンや揺しまふ

巨人形夜は狸に訪なはる

屋号にて人を呼びけり日脚伸ぶ

まつすぐに雛の見てゐるこの世かな

三鷹

布施まさ子

ものの芽の朝の光りの中にをり

かげろふの遮断機の中通りけり

地虫出づヒマラヤ杉に雨の来て

春の風わが胸中を浸しをり